

活動報告：関係学ワークショップ「関係学へのお誘い」

日時：2025年3月15日（土）13：30～16：30

場所：山梨県立大学飯田キャンパス B 館 120 教室

【ゲスト講師】

砂連尾 理（ダンサー・振付家） 西川 勝（臨床哲学者・看護師）
豊平 豪（人類学者） 藤波 努（認知科学者・身体知研究者）
久保田 テツ（映像作家）

私たちが「こんにちは」と返すのはなぜでしょうか？それには単に挨拶というよりも、他者の「呼びかけに応じる」意味があるためです。日常やケア、科学の現場でも、私たちは対象とされる相手を真に理解し、あるいは何を理解し、相手の促しや求めに応えることができているのでしょうか？対象の理解、応答の倫理、これらの問題群が関係学に含まれます。今回のワークショップでは他者理解をテーマに取り上げ、私たちがふだん縛られがちな一定の理解や物の見方について幅を広げることを目指し、多様な講師や参加者が集いました。

趣旨説明の後、まずプロダンサーの砂連尾理さんが登壇しました。ダンスと言えば素早く動くイメージがあるかもしれませんが、ところが、今回はみなさんと砂連尾さんを追って、約5メートルを5分かけて駆け抜けました。こうしたワークのきっかけとして砂連尾さんはあるとき障害のある方との出会い、付き添いで雲の動きなどふだん注意が向かない様々なことに目が開かれた経験について語られていました。次いで長年、精神科病棟や高齢者施設でナースとして人と接し、臨床哲学のパイオニアとして実践と考察を進めて来られた西川勝さんが登場します。理解を出発点にする暴力性への自覚、ケアのつもりが大きなお世話になる反転が容易に起こること、「あなたが思っている患者像を看護しているだけではないか」という問いかけから、お話を始められました。むしろ、他者から私がどう見えているのかを問う視点を提起されます。たとえば言語的なコミュニケーションが通用しない認知症の人に対する砂連尾さんの「ケアのようなダンスのような」アプローチがあります。そこで相手から自発的な動きが起きる、そしてその二人の関係が破綻しないのはなぜなのでしょう？西川さんはその謎、つまり即興ダンスの秘密、また精神に対する身体の特徴というものに迫るお話をされました。豊平豪さんは人類学者として様々なアートマネジメントを手掛けています。舞鶴市の高齢者施設で上記のアプローチ「とつとつダンス」の長期的な取り組みを肌で感じ、観察してきた活動について、映像記録を用いて様々な場面を紹介しながら語りだされました。認知症の方を前にダンサーは、相手から言葉で何かしてくださいと頼まれているわけでもなく世話する用事があるってその場にいるのでもなく、だからといって立ち去ってしまうわけでもありません。入居者とダンサーが唄と踊りで、また指先だけでもデュオするようなユニークな関わり合いを私たちは目撃し、耳を傾けます。豊平さんは「奇跡的なことが起こりつつも、別にそれを狙っているわけではない」と私たちに語りかけます。おもむろに太鼓を取り出し、解説を加えながら参加者と演奏を始めたのは、認知科学者で身体知研究を行う藤波努さんです。この弾き語りのようなアプローチについてうかがい知れるのは、何を話しているのかわかりにくい今日の内容について、まず感覚で伝わってほしいという願いの実践です。藤波さんをご自身の研究から主張をこう語ります。それは「人間は常に2つのチャンネルで動いている」、つまり言語と身体のパラレルな世界を私たちは同時に生きている、というものです。特に言語が優

勢になったりうまい人は逆転させたりする、私たちの世界の見方や住み込み方について、参加者とのセッションも入れてわかりやすくご提示されました。

ワークショップの後半は砂連尾さんの、身体と物、他者との関係性を探るワークで再開しました。おはながみやティッシュを身につけ、渡していくようなワークです。それらを媒体として参加者同士が相手との身体的な距離の取り方や協働の仕方を探り、今に集中します。これを受けて参加者は、自身の感じたことを言葉にするワークも体験しました。「自分の身体ではない感じがした」「隣にいる人ともティッシュとも、境界線があいまいになる感覚があった」「自分と別のものを隔てるものをすごく感じたし、それがつながる瞬間も感じる不思議な時間だった」などと様々な意見が出てきました。「わからなくなる感覚が新鮮」という声が出た後、続くトークで映像作家の久保田テツさんは問いかけます。映像作品を用いて私たちが〈見えなくなるもの〉を例示し、さらに抽象的な映像をじっと見るような例を取り上げます。映像が成り立つ背景などに思いを馳せながらじっと見るようなことが難しい今日の私たちは〈物を見る力〉を失いつつあるのではないかと。さらに「創作の最後の仕上げを大衆に委ねなければならない芸術」としての映画、という美学の考え方を紹介され、映像を見る者の能力や、メディアを介した現実の見方、死者を含む他者との関わり方へと議論の道を開きます。山崎スコウは特に異なる文化のなかで人の目を引く着物やヒジャブの例を引き合いに出しながらファッション論を紹介し、人にとって身体を感じることで、皮膚としての服の意味、揺れ動く境界としての身体の拡張と、ヴァーチャルリアリティのような〈身体を着替えたコミュニケーション〉や現実のあり方について触れました。そうして議論を進めるなかで、他者であり自己の一部にもなるようなロボットやサイボーグ技術との関係性について問いかけます。そこで他者との出会いを学びなおす契機、人の力を再発見する力となる新たな身体性の探究領域としてソーシャルロボティクスを提案しました。その後、登壇者のパネルディスカッション、次いで参加者からの声に耳を傾け、全体で白熱した議論が続きました。

他者への理解をテーマに、他者の多様な現れ方に出会うことを求めてセッションや議論を進めました。ゲストも参加者もそれぞれに様々な思い、特に「問いを見出す」ことに協力することができて実り豊かな時間となりました。関係学はまだその端緒にすぎませんが、これから〈私たち〉の共同性はどのような形を取ることができ、そこでどのような人間性や価値が問われなければならないのか、とりわけ身体性を主軸として探究を進め、参加者や協力者を募ります。最も近く、最も遠い存在として、「自己とは一個の他者である」と詩人ランボーが言うような、他者との関係への問いかけに付き添い、共に考えることもこれからの課題となります。参加者や報告を読んだみなさんにはどんな発見がありましたか？

